

筏 うどん

いかだ

飯能
西川材の里



西川材は、埼玉県西部を流れる入間川や高麗川などの流域で生産される木材で、そのほとんどが、飯能の山々から産出されてきました。西川材は、飯能の特産品として、まちの発展に大きく寄与し、飯能の歴史や文化は西川材抜きに語ることはできません。

ところで、この地域には「西川」という地名はありません。かつてこの地の山々から伐り出された木材は、筏に組んで川を流して江戸（東京）まで出荷していました。江戸から見て、西の川から流されてくる木材であることから、西川材と呼ばれるようになったといわれています。

筏流しが、いつから行われていたかは不明です。江戸幕府開府以降、町づくりや度重なる江戸の大火の復興のために、江戸時代初期から木材を送っていたといわれていますが、盛んになったのは江戸時代の中頃からです。明治時代になっても、筏流しはますます盛んで、その出荷量は「西川十萬石（二七八〇〇³m）」と呼ばれていたそうです。

入間川では、上流から飯能河原までを「山川（やまつかわ）」、飯能から荒川合流付近までを「下川（しもつかわ）」、荒川本流を「大川（おおかわ）」と呼んで区分していました。「山川」から江戸の千住までは、通常ならおよそ五日の行程でした。千住まで流すことが多かったのですが、その先の本所や深川まで流す場合もありました。

一九一五（大正四）年に武蔵野鉄道（現在の西武池袋線）が開通すると鉄道による木材輸送が始まり、また、道路が整備され、山方から飯能まではトラックで木材運搬が行われるようになります。筏流しは減少し、大正末から昭和初め頃を境に完全に姿を消したといわれています。